ぴーぷる

?から!へ。先生は海外経験のビックリ玉手箱。

写真家の沼田早苗さんと。(昭和40年代、ローマにて)

この春、県立阿蘇高校に、全国の公立高校では初めてという国際観光科がお目見えしました。ホテルや旅行業務に携わる国際感覚豊かな人材の育成を目指す同科は、商業科一クラスを改編して開設。県外からの入学者4人を含む、男子14人、女子31人の計45人で編成されています。講師第一号として教壇に立つのは、元日本航空社員の有働龍一さん(63)。受け持ちは週二時間の「観光一般」です。日航時代の三分の二が海外勤務だったという有働さんの授業は、自分の経験を元に経済・語学・文化など、様々なエピソードがポンポン飛び出してきます。

「授業を始めて、まだ一か月。生徒達も、とまどっているというのが本音じゃないでしょうか。私としては、知識をつめ込むような授業じゃなくて、勉強のやり方なり、考え方のヒントなりを教えているつもりです。『モノ』ではなく『ヒト』が国際化する事が、本当の意味での国際化だと思っていますから。しかし、人の国際化といったって単に英語がしゃべれるようになるという意味ではないんです。様々な文化や考え方の国が、お互いの立場を理解し合い、物事を考えられるようになる事ではないでしょうか。それができる『目』や『心』を育てていけたらと思っています。」

在留邦人のための文化講演会で。(昭和50年代、マニラにて)

有働さんは、旧制の県立鹿本中学から水産講習所(現・東京水産大)卒業後、昭和三十年にフランス航空に入社。三十七年の日航国際線開設に伴い日航に移り、五十九年に定年退社するまでローマ、ウィーン、マニラなどの日航支店に勤めた、言わばバリバリの国際派ビジネスマン。

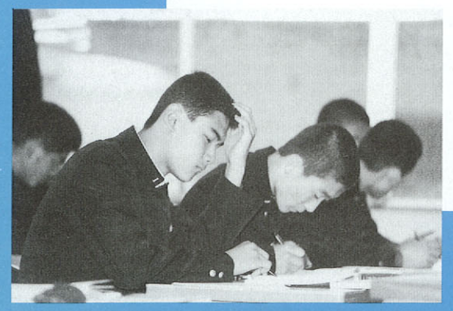
「幕末の黒船の時代じゃないけど、日本は今、本当の『開国』をすべきところに来ているんじゃないでしょうか。すべてを言わずに、『ツーと言えばカー』で気持ちが伝わってしまうのが日本の社会。でも、そんなの海外では通用しませんよ。もっとはっきりと自分たちの意見を主張していくべきですね。他の国が、なるほどと納得するような考えを、堂々と国際社会というフィールドの上で戦わせたらいいと思うんです。そうでないと、どんどん世界からとり残されていくんじゃないでしょうか。国内にいたら、こんな話もピンとこないかもしれないけど、海外に出てみると、本当によくわかりますよ。外からながめてみると、ヘンな事やってる国だなあっていう感じですね。まず、みんなが、その事に気付くべきなんです。それが国際化の第一歩ではないでしょうか。」

週二時間の授業のために、二日間は準備に当てているという有働さん。熱心な姿勢は、その語り口にも表われているようでした。

授業の感想をたずねると、異口同音に、「少しむづかしいけど、初めて聞くような外国の話が次々出てきておもしろい。」と瞳を輝かせる生徒たち。二十一世紀の国際人たちは、熱心に有働さんの話に聴き入っていました。

「高校生といえば、最も多感で好奇心の強い時期。何でも吸収してしまう柔軟な感性を持っています。私の話を通して、好奇心が少しでも興味に変わり将来、何かの役に立ってくれたら、こんなうれしい事はありません。今は教壇に立つ事が、私の生きがいみたいなものですよ。」

国際派ビジネスマンから教育者へ。有働さんの第二の人生は、今、テイクオフしたばかりです。



阿蘇高校民間講師第1号

有働 龍一さん